

第二期 第二十一号 (二版) (無料)

# 音信不通

本のビオトープ

2018.04.20 定有堂書店 発行

木を見る、森を見る

奈良 敏行

翻訳について

坂本 修一

テレビブログにまつわる

ワクサカソウヘイ

ヤポネシア ①

芝野 浩貴

本を巡るフラグメント三

ムラカミヒロミ

配達

齋藤 仁昭

エイゼンシュテイン監督

山本千津子

鳥取あれこれ その二十

内田 克彦

アランとの対話 (1)

秦卓 梅林

牡蠣のオイル漬け

あきの 素生

私家版 色彩の歴史

伊達 文

神隠し

古賀 啓三

遊動円木 (十二)

五百川知子

シユシユのはなし

ドラマメリア

…… 編集後記



## 木を見る、森を見る

奈良 敏行

(定有堂 店主)

私見にすぎないが、本屋的人間は二重性を併せ持つのを資質とする。飽きやすく、粘着性。木を見てるかと思ふと森を見ている。でもこの二つが見える場所からは、外へ出ない。

定有堂の売り場には久しく、新刊の雑誌よりもバックナンバーの方が多い。森を見るより木を見よう、とある日心変わりがあったからだ。好きな特集だけをコツコツ残す。あれこれの広がりには欠けるが、時間の蓄積が広がる。

興味を持った編集者の方が、「どうして思いついたの？」と尋ねた後に、二つの視点にまとめてくれた。一つは「土に埋めた発酵商品」、もう一つは「遅れて売る」だった。本屋的人間は、つねに自分の居場所を少しずつ動かさなければならぬ。あたかも地球の両極が移動している

かのように、それにつれて、もぞもぞ針先を修正する。森に競争が顕著なときは、木を選んでその下を動かさない。「埋める」「遅れる」もそんな選択の一つだ。

前に、雑草は自分の得意を活かせる場所を知っている、と教えてくれる本の話をした。雑草の物語とは、どうも得手に帆を掲げる、ということに尽きるもののようにだ。本のビオトープも、つまるところそんな場所をめぐっての物語だ。

去年の暮あたり、文庫の新作がせっかきつちり入っているのに、売れていない事実が気がついた。何かが終わっている予感がした。森のかたちがいつの間にか変化している、と感じた。じつは変化のなさに自分が飽きて、磁極を動かしてみようとしたのかもしれない。

二月に入って、ちくま文庫を中心に、手当たり次第に各社文庫目録に目を通し、「土に埋め発酵している」タイトルを掘り起こした。「雑草文庫」とでも名付けてもよかつたのだが、でも本気になつてはいけなないと戒める気持ちもあつた。一方、名のある草花本は、パイインターナショナルを中心としたアート本だ。例えば『彼らがいなくなる前に』のような写真集が耳目を集める。また必須なのは人文書だ。小教だが、この「木」の足回りを踏み固めてくれる大切な人々がいる。現代社会に直結するもの、また原理原則を究める哲学の本も欠かせない木の

実の一つだ。

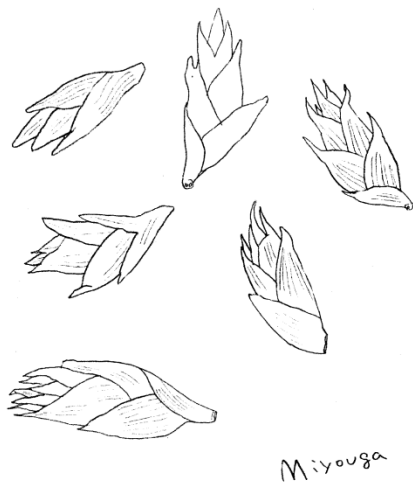
雑草文庫は、森の記憶だ。長年の勘で、昔売っていた銘柄を拾い起こしているだけだが、品切れ絶版にならずによく生き続けているなど驚く。土壌ならぬ文庫目録に記憶として久しく埋もれ、発酵のときを急ぐこともなく、雌伏している。時々の文脈から解き放ち、内容よりもレイアウト・デザインへの解釈を重視して、すべて表紙を見せて展示する。棚ざしでないから、グループで何かを主張する必要もない。きつと文庫本たちも、まとまることに飽き飽きしているはずだ。

ふと気づくと、思いがけなくも店内ビオトープが各所に生まれた。脈絡もなく根拠もなく、思いがけないところに棚田のひとつのように、表紙を見せて息づいている。小さな本屋の暮しで飽きないためには、どのような逆して本の森羅万象という気配を醸し出すかに工夫する。逆にいうと森羅万象でなければ飽きてしまう。どんな工夫があり得るだろう。空間の広がり、はなから期待できない。なにか別の工夫がある。実際に冊数が多いわけではないから、錯視の応用はどうだろう。エドガー・ルビンに有名な「隠れた顔と杯」がある。同時に両者を見ることができないところが肝だ。ネッカーの立方体というものもある。一つの図の中に違った立方体が交互に見える。本屋の現場でいえるのは、不易と流行のモザイク模様が、

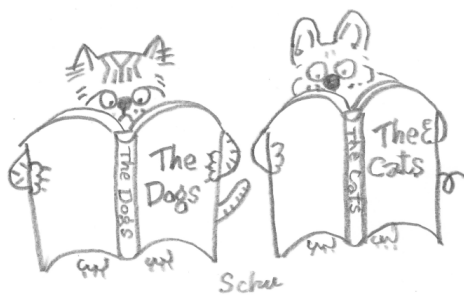
森羅万象と関わり合いがある、ということだ。どちらも大事だが、ゆらぎを工夫し続ける必要がある。

本屋は新刊をくまなく求める。もちろんわたしもそうしている。きちんと森を知らなければ、そこに本屋の現在はない。でも生きること、森を選ぶのでなく、木を選ぶことのように。雑草にことよせて生き抜く、本屋の仕事はかようにややこしいが、しかしこよなく楽しい。

2018.03.26



### 猫風閣ギャラリー



## 翻訳について

坂本 修一

(猫風閣主人)

本冊子の前号に、T Y堂のご堂主をはじめ翻訳について述べられた文章があったので、私も日ごろ感じていることを書いてみたくなった。

\*

これまで、翻訳された書物をそれほど多く読むことができていない。たまたま最近、ある外国の動物行動学者の本を続けて三冊読んだ。翻訳者は三冊とも別人だった。仮にその三冊をA B Cと呼ぶ。

Aはどこどころに学術的考察が入るエッセイ集だ。

扱われているのは何種類かの身近な野生動物で、二十五年前に読んだものを再読した。初読時、読み終わるのを残念に思いながら読んだことを覚えている。左の親指に触れる残りのページ数がだんだん少なくなっていく。紙に印刷されたいい本を読むときの独特の感覚だ。今回も

そうだった。それと同時に、人はこんなにも読んだ内容を忘れるものだろうかと愕然とした。それはたぶん私だけのことだろうが、そのおかげで感動を二度味わえた。年をとるのもいいものだ。

BもAに似た内容の本で、扱われる動物が家庭的なものに特化されている。Aの好印象があったので期待して読み始めたのだが、どうも調子が出なかった。内容に興味があるだけに、読み進むにつれ、もどかしさがつづいた。

Cは思索的というか、やや抽象的な内容の本だ。この本を読むのに難渋した。もともと思索的な内容の読書は苦手としているが、今年に入って快進撃を続けていた読書ペースが停滞した。ときどき、あとのくらい読まなければならぬのだろうか、本を下から見、読んだページが無慮何分の一とかやっていた。ついには、著者はペダンチックなスノブなのではないか、などという不遜な考えまで頭に浮かんだ。

\*

翻訳ものにはときおり、――で挟まれた説明が入る。訳者によつてはそれを（ ）にされていることもあるように思う。読む側からすれば、そこを順序どおりはじめに読むと理解と興味が断たれる。そこはとぼして読まねばならない。とぼして読んだ後、あらためて読むと

よい。そこは参考説明の部分だ。

欧米系の外国語では、一文のはじめで事が決する場合が多いように思う。つまり、「○は△だ」とか「○は△ではない」とかが、まずわかる。そこがとてもいい。ただ、ときに「――」や「:」による、長く説明的な修飾の叙述がある。大学受験のとき、英語の勉強で感じていたが、これはとてもめんどくさい表現方法だ。ふつう日本語でそのような叙述はしない。それをまじめな翻訳者が、順序どおりに訳されるのではないだろうか。

\*

外山滋比古氏が、その著書の随所で、「翻訳者は、語順だけではなく、文順も考えるべき」ということを述べておられる。曲解しているかもしれないが、私なりに理解し、同感している。

例えば先の、「――」や「:」で括られた部分をその順序どおりに訳した結果は、日本語ではない。いや、言いつぎた。日本語ではあっても読解難度の高い翻訳体だ。だから、「・」（ピリオド）で括られた外国語の一文を日本語にするとき、そのまま一文として「。」で括るのではなく、二文や三文にしてもいいのではないか。というより、そうするべきではないのか。難解になりがちな長文を、理解しやすい、いくつかの短文に分けるといいと思うのだ。

外国の優れた思索に、一人でも多くの日本人が触れることにおいて、翻訳者の担うものは大きい。

彼岸不遜を重ねるが、誰かが日本語に翻訳した文章を、別の誰かが日本語としてわかりやすい表現に訳しなおす作業があつていいのかもしれない。それはもちろん、はじめに翻訳した人が一人で行う作業であつてもよい。ほんとうは、そうあるべきなのだと思う。

「じゃあ、お前やってみるか」と言われれば、「ごめんなさい。さかしらな言葉が実践に勝てるわけないじゃないですか」とか言いながら、いつの間にか姿を消してしまうしかない。

\*

Aは初読時に名著だと感じたが、今思うと名訳でもあつた。

\*

ところで、以上のヒントでABCの書名がわかった方は、TY堂までご連絡ください。豪華賞品の発送は当選者の発表をもつてかえさせていただきます。当たり！もう一本……買ってね。

## テレビブロスにまつわる

ワクサカソウヘイ

(文筆業)

言葉を扱う業者として致命的なことを告白するが、「付度」という言葉の意味合いをつい最近まで、つまり二〇一八年三月まで、きちんと理解していなかった。いや、正しくは理解をずっと避けていた、と言うべきか。

「付度」という言葉がどうもこの世には存在しているらしい。それを知ったのはちょうど一年前、つまり二〇一七年の三月頃。ほほう、「付度」か、で、それはどんな意味？なんて尋ねる間もなく、「付度」は光速の勢いでもって、まるでずっと前からそこにいたかのように、世間にはびこった。こうなってくるとこつちも意地で、「付度」の意味合いを知らないまま、どこまで知ったかぶりを貫けるかのひとりチキンレースを開催。辞書も引かぬし、ネットで調べるなどもせず。「付度」？ああ、知ってる知ってる、温豆腐になめこをかけた小鉢のことで

しよ？ みたいな感じで、なんとか一年間を走りきった。しかしまあ、さすがにここが限界点、ついに一昨日、「付度」のちゃんとした意味合いをふとした拍子に知ってしまいました。うぬぬ。

言葉が瓶のラベルだとして。中身のジャムが一体どういう味なのかも知らぬまま、ラベルだけを耳で認識していることは、私に限らず、誰しもよくあることだと思う。最近だと「マジ卍」とか「アゲポヨ」とかが、私にとつて味の知らないラベルたち。

「テレビブロス」というラベルがある。このラベルが抱くジャムの味を知ったのは、中学二年生の時だった。いや、むしろ、最初はラベルを見ないで、まずジャムだけを舐めたのだと思う。そして「こんなものが世の中にあるのか……！」と驚き狼狽え、ラベルを見てみたらそこには「テレビブロス」と刻印されていた、みたいな出会い方だった。言葉よりも先に概念が来た。非常に珍しい邂逅だ。

私にとつてテレビブロスは、他とは一線を画す雑誌だった。テレビの番組表にまとわりつく、雑多で部室的なコラムたち。青春期において、隔週発行されるたびに目を通す唯一の雑誌だった。いつかテレビブロスで書きたいな。そんな全国一万人のボンクラ男子が必ず一度は夢見ること、私も平然と夢見ていた。

それから時は経ち、気がつくとい私はテレビブロスでコラムの連載を始めていた。「夜の墓場で反省会」というふざけたラベルのその連載が続いている最中、私はずっと夢の中にいた。しかし、連載開始から四年目に突然、筆が止まった。自分の中で急激に「連載終了のタイミング」が訪れ、編集担当さんに泣きながら卒業を伝えた。いまでも、身勝手なことをしたな、と思う。

それから一年半後。その編集担当さんから、一本の電話が来た。「冬季五輪の特集をやるんですけど、コラム書きませんか」。喜んで引き受けた。冬季五輪の特集なのに、「冬季五輪にはまったく興味が無い」みたいな内容のコラムを書いて送ったら、そのまま載った。実にテレビブロスらしいな、と思った。久々に母校の職員室に立ち寄って、挨拶ができた心地だった。

その一か月後。テレビブロスが春よりリニューアルされる、との発表が世間に流布された。番組表がなくなり、月刊化になり、様々なコラム連載陣がいなくなる。それはラベルこそ「テレビブロス」だが、もはやジャムの味は知っているそれではなかった。私は冬季五輪特集依頼を拝受した際にすでにその旨を聞いていたので、覚悟はできていたが、やはりその発表が一回っている様子を目の当たりにすると、「ああ、本当なのか」という具体的な喪失感に襲われたりした。これでもう、帰る学校は

無くなった。一緒に宿題を提出していた同級生たちもそこにはもういない。私はやっと、前だけを見て歩くことにした。

中学二年生の時に舐めたあの複雑なジャムの味を、私はしっかりと覚えていた。覚えたことを、ずっと忘れなければ大丈夫。あのジャムを孕む給食を出す学校はもう後ろにはないが、前にはもしかしたら、蜃気楼のように新しい学校がゆらめいていることがこれから先、あるかもしれない。その時は、あの時のジャムの味を思い出しさえすればいい。ラベルはその後で、貼ればいい。

以上が、私の、この春にどうしても書き残しておきたかった話である。魂さえ絶やさなければいい、みたいなことが言いたかったのである。お恥ずかしい。ブログに書こうかと最初は考えていたのだが、世間に広く伝えるような話でもないだろう、と自分なりに「忖度」して、ここに書いてみた。



## ヤポネシア ① 島根発島根着

芝野 浩貴

(地球探検家)

南半球の島を巡った時、ユネスコ協会の人から世界遺産の話  
を聴くなかで、石見銀山のナカムラブレイスの企業精神に共鳴  
したり、長崎出身のジャーナリストと原爆・原発の話しながら  
本の声を聴く重要性を語った後、私が鳥取出身とは知らない  
その二人から、奇しくも田舎のパン屋が見つけた「腐る経済」で  
有名なタルマリさんのことを一押しで勧められた。その時点で  
2度ほどタルマリに行ったことがあったので、逆に鳥取の事情を  
話した覚えがある。まさか、地球の裏側で、世界を知り尽くし  
た人々から鳥取を絶賛されるとは思ってもみなかった。(つい先  
日も、ピザを食べに行った)

船内では私同様、職を辞して地球を回っていた3、40代の若  
者3名と同部屋だったため、いろんな企業の話の聴いたり、音  
楽・写真・体作りなど多岐にわたって語り合い、旅を楽しんだ  
が、下船後は、皆再就職をした。別れ際に彼らに今後の私の動  
向を聞かれたが、「ミクロネシアもメラネシアもポリネシアも  
回ったので、再びヤポネシアを回るよ」と返答した。ヤポネシア  
とは、島根敏雄の作った造語である。

その後、北海道、本州、四国、九州の四島をぐるぐる回遊し

ているが、日本の島としては、礼文島、佐渡島、隠岐の島、軍艦  
島、屋久島に行った。過去に遡れば、江田島には学校行事の生  
徒引率や広島県の高校生への講義で行ったこともある。日本三  
景の宮島には、観光で何度か寄ったが、厳島神社までで引き返  
していたから、地球探検家としては、弥山に登ることにした。

花崗岩の節理のため遠くからは観音様の横顔のように見え  
る。厳島神社の柱は上部は木だが、腐れてしまうので下部は花  
崗岩で土台を作っている。大支柱は樹齢五百〜六百年の楠が  
使われている。干潮時に砂浜へ目を凝らすとシオマネキがたく  
さんエサを求めて活動していた。周防と安芸の境界にある宮島  
は要衝であるがゆえに、戦場ともなった。厳島の戦いで、毛利  
軍が陶晴賢率いる大内軍を滅ぼした時は、弥山の地形を利用  
し、桶狭間の織田信長のように崖の上からの奇襲だった。一  
方、厳島神社の御神体三神は女神である。女人禁制ならぬ男  
的排除なので、鉄や斧を土に刺すことを禁じられていた。耕作  
はできない。だから、廿日市から宮島に米を運ぶ市が開かれた  
20日に市をしたので「はつかいち」と呼んだ。毎年3月に大会参  
加のため、部員を運んでいた時には深く詮索してなかったが所  
縁の地でもあった。弥山は原始林の存在が植物愛好家を惹きつ  
け、温帯針葉樹と南方高山植物が共存している。ニホンジカが  
生息しているが、餌やりを禁じたため餓死していた事実もあ  
り、鹿の餌となる草の栽培の必要性もでてきている。

四国山地や瀬戸内海が四方に見渡せる頂上から下山し、そ



の足で周防大島に向かった。内田樹氏や独立研究者の森田真生さんの講演やら、ノンフィクション作家兼シンガーソングライターの寺尾紗穂さんのライブ、「音信不通十三号」でも言及した民俗学者赤坂憲雄氏の講演などが、矢継ぎ早に予定されていたからである。(内田氏と森田さんの活動はミシマ社発行の「ちゃぶ台」に、赤坂氏と寺尾さんの民俗学に関する考えは年末年始の朝日新聞の土曜往復書簡に、それぞれ掲載されている。瀬戸内海では、淡路島、小豆島に次いで3番目に大きな島である。

そして、何より周防大島は、へ歩く民俗学者の宮本常一の生誕の地である。宮本常一記念館に寄ってみた。宮本は柳田国男に憧れ、昔話集を送った。27歳の時に60歳の柳田国男を京都に訪ねた。32歳に上京した時は、渋沢敬三に、「学者でなく、発掘者になつてほしい」と頼まれる。

仏像の違いを見つめながら観察力を磨いた。村人への聞き書きで資料を作つていくときに、村人を「話者」と記述する記者に猛然と怒った。

「話者とはなんだ!!話してくれた人は教えてくれた人なんだ」と。彼の人生訓は、「その土地の一番高いところに登つてみよ人の見落としてるところを見よ 人生落ち葉拾いである」である。故郷で、海から見た日本を書こうとした途中亡くなる。民俗学者として、日本全国16万キロ歩いた。一日に50キロ歩いたとしても、10年近く毎日歩かねば達成できない。とても真

似できないが、真似したいとは思ふ。

多くの宮本常一の著作の中でも有名な「忘れられた日本人」の中に書かれている土佐源氏の舞台は高知の禰原である。村の9割は森林に覆われ、坂本龍馬が脱藩した時に通つた禰原街道。役場は今は隈研吾の木造建築物として有名である。出身の坂本長利が土佐源氏に魅せられ、一九六七年の初演以来、全国各地で一人芝居を演じ続けている。役者というより、もはや宮本常一の聞き書きした馬喰爺さんの生き写しだろう。半世紀で一二〇〇回近くの公演だから、2週間に一度は全国のどこかで演じてきた。ペースだ。とても真似はできないが、真似したいとは思ふ。

一一九三回目の公演を坂本長利さんが倉敷で行なつてる頃、宮沢賢治が原稿にするまでに格闘した

メモ書きから賢治の生の声を聴き、卒業論文にしたという教え子から、隠岐の島の海士町の子供達に教えるために就職したと連絡が来た。

亡くなった石牟礼道子の報道をせずに、オリンピック報道だらけで、スポーツの「企業マスコミ貨幣化」にうんざりしている私としては、大企業に行かずに、自分の足元を見つめる彼女の声に幽かな光を聴いた。



## 本を巡るフラグメント 三

さあ、検索を始めよう！

ムラカミ ヒロシ  
〈フライング・ブックマン〉

「本を探す」ということを始めたのは中学の時分からだ。小学校までは、本屋にせよ、図書館にせよ、目の前にあるものの中から「選ぶ」だけだった。

好きな作家ができて、気になるテーマが出てきて、何軒もの本屋をハシゴするようになる。昔は、出版点数も少なく、常備の棚もたっぷりあったから、地方の書店でも、数年前の出版物も比較的容易に見出すことができた。

しかし、段々と店頭にないものや古いものを探すようになる。新聞や雑誌に載っている情報そのままに書店に注文する。来れば儲けものだが、「品切れ」「絶版」はザラである。運良く届いても油断はならない。情報源には大抵価格までは出ていない。びつくりするような値段（中学生の分際には）の本が届くことも間々あり、半年間引き取れない、といったこともあった。

目録、というものの存在も知ってはいたが、容易に手に入るのは文庫目録くらい。大手は書籍の目録も出していたが、なかなか子供の客までは回ってこない。

そんな中で発見したのが「出版年鑑」であった。どの書店にでもある、というものではなかったが、幸い行きつけの富士書店二階町本店にはあった。

で、頻繁に見せてもらって調べに調べた。店のお姉さんは、さぞ、変な客、と思つたことだろう。

ただ、万能の目録というのはないのであつて（作り得ない、とも言える）、この年鑑の場合、一番の弱点は単年版であるということに尽きた。出版年が分からないものは、何年分も繰らなければならぬ。

さらに、索引が、書名、著者名しかない。配列は、日本十進分類順になっているので、大雑把な所で見当は付けられるものの、学校図書館の配列さえ、うる覚えの中学生には荷が重かつた。

それでも、一冊二冊と、出版の事実が確認され、値段も分かると安心して客注ということになる。いくら時代がゆつたりしていたとはいへ、やはり品切れになるものはあるのであるが、時に「汚れているがそれでもよいか」「箱が欠けているがどうか」という返事が返ってくるものがあつた。残り物ということであろう。当時は美

本趣味など持ち合わせていなかったもので、構わない、と再注文すると、タイムラグで「品切れ」になってしまいうこともしばしば。なまじ幽かな光明が見えた後であるから、落胆も一入であった。

こんな時に覚えた手法が、「出版社に問い合わせの手紙を書く」ということであった。これは、自分で考えたのか、紀田順一郎の著書からの仕込みであったのか、今となつては思い出せないが、ずいぶんこの手を使ったものだ。

一番記憶に鮮明なのは、新人物往来社の『真紅の法悦』を問い合わせた時。

この本は、完訳版ドラキュラの長文の解説の中で平井呈一が近代吸血鬼文学の系譜を概観するに最適と紹介していたもので、特にポリドリは読まねば、と思った。

書店注文の結果が、前述のような仕儀で入手叶わずとなつてしまったので、直接手紙を書いたのである。すると、親切な担当者が、倉庫を探してくれて一冊だけ残っていた本を確保してくれた。何百何十円かを現金書留で送り、待つこと幾星霜、届いた本は、何度も移動を繰り返したのか、埃っぽく隅々が擦り切れていたが、箱も帯も投げ込みも元セロも残っていて、初刊当時を忍ばせるものであった。

この本を枕元に置いて、幾晩も幾晩も舐めるように読んだのだった。

もうひとつ、忘れられないのは、『ドイツ怪奇文学入門』。「幻想と怪奇」のブックレビューか何かで紹介されていた本で、グリムの「ドイツ伝説集」をベースにした逸話形式の本、ということだった。「童話集」は小学生でも知っているが、「伝説集」は初耳だった。

注文したが「不扱い」のすげない返事。京都の綜芸舎という小出版社の本で、大手取次の流通に乗っていなかったのである。

で、手紙を書いた。「年鑑」に出版社一覧は載っていたので。すると、社に在庫はないが、著者の所にはあるかも知れないから、と著者の住所を知らせてくれたのである。(今では、こんなことはしてくれないだろう)

恐る恐る独文学者の前川道介氏に手紙を書き(著者に手紙を書くなんて初めて!)、親切な返事を添えて本が送られてきたのは感動であった。代金は切手でいいから、とあつたけれど、舞い上がってしまった。小銭ジャラジャラの現金書留で送ってしまった。この本は、その後の四十年余の古書探しの中でも、数える程しか見たことがない。

# 配達

坪井日記 ③

齊藤仁昭

(長崎書店)

書店近隣の美容室や病院、飲食店などに雑誌を配達しに歩いて回っている。得意先は全部で六十軒あまり。その日の雑誌の発売数によって届ける軒数も変わるが、最大で一日三十軒強というところだろうか。iPhoneのヘルスケアアプリで確認すると、多いときは日に十キロばかり歩いていようだ。歩数にして二万歩以上。長崎書店は熊本市の中心市街地のアーケード内に位置しており、アーケード内は原則車や自転車での通行ができないため徒歩で移動するしかない(アーケードの外へはたまに自転車を使う)。両手に雑誌を入れた紙袋をぶら下げて、届け先を数軒回って袋を空にしては店に戻り、雑誌を詰め直してはまた出掛けることを繰り返す。健康の為に毎日一万歩歩くという話は本当だろうか。『やってはいけないウオーキング』とかいう本も売れているようだし、一概にそうとも言えないように私の体は感じている。何せ配達業務が続くと足腰が痛い。革靴で舗装された道路を歩くからだろうか。おかげで筋肉はかなり付い

たが。配達を終えて昼食を食べすぎたりしてしまったものならもう夕方には頭が上手く働かず、品出しや発注をテキパキできなくなってしまうことがある。何事も適度がいちばんです。

体力的にはしんどいのだが、配達先の方や、街中でばったり出くわした人びとと会話するのはとても楽しい。天気が良いとなお素晴らしい。コンビニの喫煙所で休憩中の服屋のY君とこないだのライブの話や音楽の話をしたり、個人で書店をやっているK君から結婚しましたなどと近況を聞いた。開店準備中の古書店主Sさんに挨拶したり。別の服屋のT君には先日選んでもらった服のお礼を伝え、タルト屋のI君にお願いごとを聞いてもらったりなど。青空の下、仕事中に友人と会話できるなんて幸福だと思う。こういうことで充足してしまうから貧乏なままなのかしら。しかし満ち足りているので構わない。抜け道、近道、遠回りの道探しもまた楽しい。配達先に少し遠くの歯科医院があるのだが、そこへ行くにはいくつかのルートが設定できる。初めてのルートで道に迷った際に、突き当りに出現したお寺の掲示板に「行きづまったら ひと工夫 思いがけない 道がある」という標語を見つけたときは出来過ぎた話だと思ったが本当です。会社には秘密のルートには団子屋が二軒有り、休憩時間と重なる際にはお土産を買ったりしている。猫と出くわ

せば挨拶をし暫し戯れる。

\*

雑誌は可能な限り入荷した日に届けるようにしている。九州地方は東京よりも一日か二日、雑誌の発売が遅れるので尚更である。ひと昔前までは雑誌の発売日が待ち遠しいものだったと記憶している。「relax」や「ロッキンガオン」、「スタジオボイス」など、当時は発売日を覚えて書店に足を運び、隅々まで読んでいたものだ。しかしインターネットの登場以後、その雑誌じゃないと得られないような情報は本当に減ってしまった。それに伴い毎月買う雑誌もなくなってしまった。本が好きだと思っ  
ているような私がこれなので、いわんや書店のお客様をや。今後さらに書店での雑誌売上は厳しさを増すだろう。などと10年以上言うばかりで結局何も手を打てず（打たず？）の現在なわけで。雑誌に頼らない書店のあり方をきちんと考えていないと厳しいだろうと書店員2年目にして思う訳であります。

\*

とりあえずここらでコーヒーを飲むうか  
熱くて苦くて甘いコーヒー

今日の言い訳も底に沈め

くだらない話を続けたいだけだよ

悟り顔降りてくる夕暮れ時が  
僕らまたどこか追いついてるまで

僕の知る君など消えてしまえ  
君の知る僕など消えてしまえ

どこかで見たような聴いたような話が  
目の前を繰り返すそれだけのこと  
今日もまた別の昔のこと

スパイスを効かせてよいつもの調子で  
少し遅めに来た夜を踊り続けよう  
そして明日には忘れてしまおう

僕の知る君など消えてしまえ  
君の知る僕など消えてしまえ

歩き出す二人も夕闇にまぎれて  
思い出すようなことになる

（ケバブジョンソン「コーヒー」作詞：杉浦真寛）

## エイゼンシュテイン監督



山本 千津子

(KOHKA コーシカ)

今年はソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインの生誕百二十周年にあたる。世界中にあるエイゼンシュテイン協会やシネクラブなど、監督を愛する人たちによって、作品の上映やイベントが予定されていることだろう。その監督について長年にわたり研究し、ロシア国立中央映画博物館長でもあったナウム・クレイマン氏が、東京と京都で開かれる講演会のため来日された。桜の時期にはまだ早かったが、姫路城観光を希望された氏を案内する機会に恵まれた。

五年にわたる改修後、姿を現した白漆喰の美しい装いは白鷺のごとく、三年前から再び私たちを迎えてくれている。急増する外国人観光客のために十九か国語のパンフレットが用意され、ロシア語版もあった。助かったと

思ったが、お城の説明や歴史よりも城全体の美しさ、どの角度からどう見えるか、その構造ゆえに違った表情を見せる面白さ、映画のロケに使われるとするならば……映像の世界を頭の中で創つていかれているようだった。大天守六階までの急な階段を、八十歳のクレイマン氏は休むことなく登られ、最上階にある神棚に向かって頭をさげられた。モスクワに帰ったら、友人にも勧めたいとのことだった。

映画を年に一本見るか見ないかの私が、クレイマン氏と映画の話で盛り上がることはない。小津安二郎監督の映画をほぼすべて見られて、今回の東京滞在中には念願の「東京暮色」を見ることができ、たいそう喜ばれていた。「東京物語」しか見たことのない私よりも、日本人の忘れてしまったものを感じ、逆にそれらを善きもの、美德として受け入れられているような気がした。映画祭を主宰する立場からも日本映画だけでなく、世界各国の映画を見てこられた。ヨーロッパの主要言語を話されるだけでなく、映画を通してあらゆる文化に接し、よいと思われるものが自然に身についていったのだらうな、と思いつながら直接聞いてみた。やはり、自分が持っている文化に足りないものをご自身で取り入れられ、勉強されてきたそうだ。その謙虚さと異文化に対する尊敬の気持

ちで、映画を見てこられたのだ。

クレイマン氏の魅力的な人柄や品性は、映画を通してつくられたのだろうが、子供の頃からの強制移住など、いくつもの苦い経験がその根底にあつてのことだろう、と思う。

講演会に先立って、エイゼンシュテイン監督の「イワン雷帝」が上映された。京都文化博物館のフィルムシアターは満席。第一部と第二部、三時間を映像と字幕で追いつながら役者の表情に見入っていたが、プロコフィエフ作曲の音楽から場面の状況、その場の空気、登場人物の感情が伝わってきて、こちらの想像力をかき立てられ、心が動き出すといつの間にか曲に関心がいつてしまった。音楽が言葉以上のものを伝えている、物語っているとはこのことか……。

クレイマン氏自身が監督となつて、生誕百周年記念に作られた、三十分ほどのドキュメンタリーでは、プロコフィエフと話している制作過程の様子などの未公開フィルムから、エイゼンシュテイン監督が人として私たちの前に現れた。講演会でも漢字、歌舞伎、日本の文化・芸術への関心が深かった、才能あふれるエイゼンシュテイン監督について語って下さった。

アーカイブの仕事にも長年携わつてこられたことから、保存することだけが目的ではない、そこには目に見えない数多くの物語が存在する、目に見えなかったもの、なかったものが現れてくる、とおっしゃる。モスクワのある女性からの手紙には「古い映画で母の若かった時代を見るのができて、今、母の気持ちがよくわかりました。ありがとう」と書かれていた。アーカイブから心を打つ話がいくつも生まれてくる。それゆえ、京都文化博物館や神戸映画資料館で出会った、アーカイブに情熱を傾けている人々を同志として喜ばれていた。私たちは使命として、存在した時間が自分の生の前後につながっていくこと、次へつなげていく仕事として、心からこの仕事を愛していると。

エイゼンシュテイン監督のおかげで、世界中のファンと友達になれた、といつも監督に感謝の気持ちを持って、交流を続けてこられたクレイマン氏に接し、改めて映画について考えさせられた一日となった。

# 鳥取あれこれ その二十

内田克彦

(地域研究家)

したでせうか？ 恐らくは苦しい首枷見たやうな生活に私等は喘いで来たのです。(略) 異なつた性を持つた二個の人間が一緒に居て何の争鬭なく暮して行くことが出来ませうか。

(承前)

朝鳥は、近代劇協会の機関誌『近代』創刊のための編集者として大阪から東京に戻つた。一〇月一日、青鞥社が東京に帰つてきたみどりの歓迎会を開く。しかしながら、『近代』は一九一三(大正二)年一二月の創刊号のみで廃刊、朝鳥の収入の当ては外れた。みどりは姫路の「驚城新聞」に初めての連載小説「呪ひ」を書く。暮れに次男のなつきが亡くなる。新聞連載が終わる翌年一月末頃、みどりと朝鳥は別居する。お互いが独り立ちできるように一旦一人になつてみようという意図の別居である。別居した二人は誌上で事実を公表し互いに心境を語りかけた。『処女』五月号に、朝鳥と別居しての感想「危険なる年齢(別れて住める良人へ)」が載る。

十四(大正三)年三月、みどりは東京日日新聞に入社する。当時は婦人記者と呼ばれて珍しがられた職業であるが、結局秋の終わりに新聞社を辞めて再び朝鳥と暮らすようになる。この一四年から一七(大正六)年頃は、みどりが社的にも認められつつあつた時期である。

一五年『婦人雑誌』一〇月号に、生田花世の「恋愛巡礼」についての批判的な内容の感想「生田花世女史に与ふ一生活の恋愛化 恋愛の生活化？」を書く。それに対して、花世は『青鞥』五巻九号に多少皮肉めいた「感想より追想へ」を書く。

また、一六年『新潮』一月号の特集「私たちの作家を志した動機及び文壇に立たんとする抱負」には、みどりの「私の文学」を始め、吉屋信子、素木しづら八人が執筆しており、若手の作家として期待されていた。

全く私等は種々の経験をして来ました。結婚して以来真に楽しい人生と云ふものを味わつたことがあります

因みに、尾崎翠は大岩尋常小学校に代用教員として勤めながら『文章世界』などに投稿し続けており、一五年



六月号の読者投票による投稿作家秀才選で、吉屋信子らと並んで次点に入り、さらに一六年『新潮』一〇月号の特集「余が最も期待する新進作家の一人」に、「素木しづ子氏に就いて」を「尾崎みどり」の筆名で寄稿するなど、みどりより八歳年下の尾崎翠が文学活動を始めたのはこの頃である。翠は一七年三月に初めて上京し、以後活躍していくことになるが、先行する「みどり」の筆名を意識して「翠」と名乗ったのではないかと、何の確証もなく考えてみるのも楽しい。

一六（大正五）年七月、花世と山田たづを編集責任者とする女流文芸雑誌『ピアトリス』が創刊された。みどりは発起人一四名のうちの一人で、社員名簿にも名前が挙がつており、翌年三月に廃刊するまでの間、二篇の随筆と一篇の小説を発表している。この『ピアトリス』は二〇〇三年に復刻版が出ており、岩田ななつ氏による「解説」によれば、名付け親は生田長江、と推測している。

『青鞥』が無期休刊になったのが四カ月前の三月（二月号まで刊行）。『青鞥』に関わった女性たちの多くが、『青鞥』を引き継ぐ形で、『ピアトリス』に名を連ね、再編集した。

ところが、翌一七年二月一〇日、『世界新聞』に「咲く花」の連載を始めるも、二月一日に長女の葵を産んだためであろうか、一八年二月一〇日に第五七回で突然中断し、未完に終わる。

一九年には、『文章倶楽部』に二篇を発表するのみであり、極端に少なくなる。

翌二〇（大正九）年三月二八日、平塚らいてう、奥むめお、市川房枝を発起人とする「新婦人協会」の発会式に出席、六月『文章倶楽部』に「日光の下」を書く。

朝鳥は、八月頃「爪哇（ジャバ）日報」の主筆として単身ジャワに渡ることを独りで決めた。みどりには宣言的に言っただけであった。

八月二〇日、朝鳥の送別会が開かれる。同二二日、みどり、朝鳥、子供たちは信州のみどりの実家に行く。その後、朝鳥の実家である東伯郡社村字不入岡へ向かう。朝鳥がジャワに渡ってから、みどりと子供たちはここに滞在することになる。九月五日、朝鳥は神戸から出航。

一〇月、みどり発病する。病名、子宮癌

（以下、続く）

# アランとの対話 (1)

くアランの許暫し思索に耽るく

秦阜梅林 (やすおかばいりん)

(楽人)

序

**B** 樂に就ひて此迄どれ程語られて来ただらう？ 音楽家、関係者許りでなく哲人、科学者、文人……達にも。其処には目も眩む偉人のリストも容易に作成されやう。しかし樂に就ひてペンを以つて、誠に真理に触れ核心に迫った人はごくごく一握り。

中で思想家アランは、かなりユニークな存在として専門家の目も惹く。

其の真摯な言葉は、時代・情報量も違ふので較ぶる事こそ出来無いけれど、こと樂に関する限りかのゲエテ翁さへ遙かに凌駕する。何より他の哲人、文人達が評論する立場、即ちいつも(樂の)蚊帳の外から非専門的に論じ、樂人が弾く立場・つまり現場の内側から一方的に主張するのに対し、彼は奏る側、聴く側からも絶えず立体的に多チャンネルのステレオ宜しく冷静に聴き樂興の経験を交え思索する。さうやって樂興の内側から生じ昂まる、

特殊で固有のエモーショナルなライウ、感、其処にだけ見られる眞理を決して疎外する事無しに本質を論じ、良し悪しではなく汎る可能性を客觀的に聴き判断し、ごく手短かに語る。此程偏りなく靜かに思索し深めた人もあるまひ。

(1) 音とメロディについて

**A** 「自然の儘の声は耳障りだ。特に情念によつて昂まる声は、絶えず変化し甲高いキイキイ声になり、遂には訳の解らぬ興奮しか現さなくなる。一方、特に若い声や力のある声、自信のある声は、時に自分で自分の位置を定め、自らを手本とし乍ら巨きくふたり小さくなつたりする。話し手は音声そのものに注意を向け、其れを引き延す事に喜びを感じている。田園生活の慣習的な合図はそうやって出来てくるので、警告の合図が叫び声であるのとは質を異にする。人の美しい声が常に平和な田舎を連想させる理由はそこにある。中略

歌の完璧さとは、同じ音を変化させる事なく弱音から強音へと導くところに常に成り立つ。それこそが自制的最も完全な印なのだから。純粹という言葉が此処では豊かな強い意味を持つて居る。」

**B** 「若い声は必ずしも、年齢に拠る訳ではありませんよね？私は8代半ばのアルフレッド・クラウスの歌ふヴェ

ルテル※の初々しき瑞々しさに息を呑んだものです！但し目を瞑ってね」(笑) **A** 「(原作の) 主人公の精神を謳って居るのだね… 節制とテクニクの美しい調和の印」  
**B** 「力強い声自信に満ちたそれは楽派を越へ国籍や人種も超へて…」 **A** 「歌声が内面の動きの全てを露呈すると云う意味で、喜びは繊細な人々の感じる喜びだ、芸術とは、選ばれた対象や制作された対象の観察によって、体を訓練しようとするもの。そしてたぶん音楽は、全ての芸術の内で、私達の情念に対し最も大きな力を揮う」  
「言葉は、少し活気づくくと常に或る種のメロディーを帯びて来る。メロディーは楽音の単なる組み合わせとは別の法則に従う事であり、自然に生じるメロディーがある」という事だ。」  
「本当の音楽家は、本当の詩人以上に、自分の苦しみを突き放して、目の前に、しかも人間の視覚に収まる距離に、保つのだ。自らの不幸と全ての不幸を、過ぎ去って遠くにある対象としてじつと見つめるこうした状態は、他に適切な言葉の無い為、時にメランコリー等と呼ばれる。こうした思い出と忘却全体を、音楽はものの見事に形象化する。歌う魂は内部に幸福を持って居るのだ」  
「幸せに生きると云うのは自分を再発見し取り戻す事だから。だからこそ、音楽は思い出を整理するのに適して居るので、苦しみに慰めの寄り添うような、充実し圧縮された時間が其処に出現するのだ。詩は物の

間を航海するが、楽はとりわけ時間の中を航海する。楽は優れた歴史家だ。」(Aアラン、B梅林) 哲人との対話は夢幻のやう、忽ち過ぎ去ってゆく…

2018.03.03

※ヴェルテル↓ミゲエテ原作「マスネ作曲の歌劇。今回のテキスト「芸術の体系」アラン著長谷川宏訳光文社古典新訳文庫 今回の一枚 Gヴェルディ歌劇「リゴレット」(原作Vユゴー) FM「アーヴェエ作(1853) GAガヴツツエーニ指揮フィレンツェ五月祭合唱団管弦楽団 Eバステイアニーニ、Rスコット、Aクラウス他(リコルディ1969)

画. A. T



# 牡蠣のオイル漬け

あきの素生

(くうねるめがね)

友人から、牡蠣のオイル漬けをもらった。手づくりのものだ。

どうやって作るのだろう、家で作れるのか。塩でも、砂糖でもなく、オイルに漬けて、足の早そうな牡蠣を保存することができるんだな、と、とんちんかんなことを思ったりした。

牡蠣といえば、鳥取に来て、夏に牡蠣(岩牡蠣)が売られているのに驚いた。出身地では、牡蠣は冬の食べ物だった。

これはひとつ、食してみねばなるまいと思い、近所のスーパーで、殻つきの岩牡蠣を買って帰った。あたためればぱっくりと口を開けるといふ地元での記憶そのままに、とりあえずレンジでチンした。ところが、チンすれどもチンすれども殻が開かない。あたためようが足りないのかと、フライパンで焼き、湯を入れて茹でたが、全

く開く気配がない。途方に暮れつつネットで調べると、岩牡蠣の開け方を紹介した動画があり、まず貝柱を切らなければいけないのだと知った。テーパーナイフをこじ入れて貝柱を切り、何とか身にありつけた。「岩牡蠣に火を入れて食べるなんて」と後日お叱りを受けたが、それでも、旨味の濃厚さに驚き、いっぺんに好きになった。以来、毎年季節になるとスーパーで買ってきて、生のままレモン汁をかけて食べる。殻つきでないものをだが。

さて、オイル漬けである。こちらは冬の牡蠣(真牡蠣)だ。

瓶のふたを開ける。オイルには、ぷりぷりとした牡蠣と、薄切りしたにんにく、鷹の爪、ローリエ、粒こしよが入っている。塩味はない。冷えているので、白く固まり気味だ。

食べ方の指南を受けた。曰く、食べる量だけ小袋に入れて湯煎するか、レンジなら、牡蠣が破裂しないよう様子を見ながら、慎重にあたためるとよい。あたためすぎると身が縮むし、貝柱が固くなるので要注意。俄然期待が高まる。完璧にあたたためてやろうではないか。レンジで。

幸いなことに、我が家のレンジには「300W」モードがある。今まで使う機会がなかったが、ちょうどいい。牡蠣を3つ小鉢に移し、これで40秒あたたためてみる。

レンジから出すと、オイルが溶けて、緑色に透きとお  
り、ぴかぴかしていた。牡蠣はそれぞれつるりとして、  
小鉢の中に鎮座ましまして。

しかし、オリーブオイルって、なぜこんなに食欲を刺  
激するのだろう。にんにくの香りも相まって、一刻も早  
く食べたい。白ワインも日本酒もないが、とにかく食べ  
たい。いただきます。

オイルには塩味がないと書いたが、牡蠣の中に味が  
ぎゅっと詰まっていた。牡蠣本来の味を濃く煮詰めたよ  
うに、ぎゅっと。オイルに漬ける前に、手をかけている  
のだろう。粒こしょうのアクセントもいい。指南のおか  
げで身は柔らかく、あの腹ともいうべきふっくりした部  
位はとろけるようだ。少しずつ少しずつ口に入れ、でき  
るだけ長く味わった。

牡蠣を食べ終わった後には、たっぷりとオイルが残っ  
た。牡蠣だけ取り出したつもりが、冷えて固まったオイ  
ルが思った以上にくっついていたので。これはバゲッ  
トを買ってきて、浸して食べよう。小鉢にラップをして  
おく。

それとは別に、先ほどの指南の続き、友人からは、余っ  
たオイルはペロンチーノにするとよいというアドバイ  
スをもらっていた。なんともおいしそうな提案だ。牡蠣

をすべて食べ終わるまでなんて待てない。オイルだけす  
くって、以前同僚に教わった「そうめんペロンチーノ」  
を作った。そうめんは、ゆで時間が短くてよいとは彼女  
の言だが、まさにそのとおり。しかも、細いめんにおイ  
ルがよく絡み、旨い。（このことを友人に報告したら、  
もう牡蠣を全部食べたのかと驚かれました。そこま  
で食い意地張ってない、と思ったが、待ちきれずにフラ  
イングしたのだから大差ない。）

もちろん、スパゲッティでも違ったおいしさがあるだ  
ろう。熱したオリーブオイルにガリックスライスを入  
れ、弱火でじっくりカリカリに揚げたあと一旦取り出し、  
そこに牡蠣のオイルを足して、と考えるだけで涎が出る。  
この幸せが一瓶分続くのだ。友人には感謝しかない。



(イラスト・あきの素生)

# 私家版 色彩の歴史

伊達文

(人生休憩中／ノージャンルイベント)

好きな色が、そのときどきで大きく変わる。

子どもの頃はモノトーンが好きで、初めて買ってもらったお財布は、黒と茶色だった。

一方で、基本的にもらった服で育ったし、上京してからもさまざまな人から服や家具をもらって生きてきたので、全体的には、雑多に着たり持ったりしてきた。「文ちゃんは本当はどんな服が好きなの？」と聞かれるくらい、その日その日で着ている服の傾向が違っていた。服をくれる人それぞれの趣味が違うので、色もジャンルもばらばらだったのだ。今日はガーリー、今日はシック系ボーイッシュ、今日は…。趣味でないものは断るので、何でももらっているわけではないのだが、素材の組み合わせにより違う雰囲気ですごくすることが楽しかったし、服

を買ったことがほとんどなかったもので、「自分はこれが好き」という強い希望がまだなく、結果として多様な服を着ていた。

それが、東京に住んで何年もたち、物を減らして当社比少しばかり片づけができるようになった頃だろうか。子どもの頃の反動で、狂ったようなピンクブームが来た。小物から大物まで、ピンク率をじわじわと、ときに大胆に上げた。引越しを機に「冷蔵庫スペースピンク」で検索してみつけたピンクの冷蔵庫を買い、台所の戸棚の表面が剥がれかけていたのをいいことに、大家さんに許可をもらってピンクに塗った。それだけの面積がピンクになると、さすがのピンク好きでも、成分過多で「うっ」とくるものがあつたけれど。

ピンクではずみがついたのか、その次に来たのがカラフル期。やたらとカラフルな恰好をしていた。しかし、その結果気づいたことがあつた。有限の財源から気に入ったものを手に入れるとなると、すごく気に入ったものを一個ずつ買うわけだけど、それで私の服装や部屋がどうなっていたかと言えば。タダでもらった単品か、ものすごく気に入って買った単品の寄せ集め…つまり、ちぐはぐでこちゃこちゃしていたのである。

本や雑誌を読んだり、きれいな部屋に住んでいる友達の家を参考にしたりしてようやく気がついた。よほど上

手にやらないかぎり、とびきり気に入った別々の風味の物が一品ずつあるより、同じ色や形のを並べたほうが上手くいく。単品では輝かなくとも、部屋全体の色調が揃っていたほうが、すっきりして見えるのだ。

センスのない人間に、多彩な風味をとりまとめた部屋や服は高度すぎた。そんなこんなで、約3年前、空前のホワイトブームがやってきた。白く塗れる物は塗り、生活用品も衣類も、買い替えたり足したりするたびに白いものを探して、総合的に白くて無地の生活を作っていた。

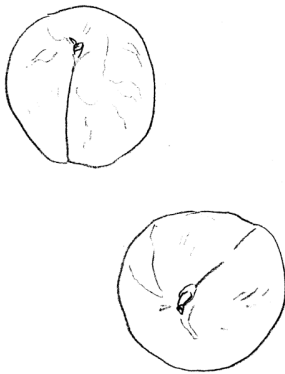
しかし、いい感じにまとまりが出てきたことで永久に続くかと思えたホワイトブームも、永世ならず。青い服を多用する友人との出会いがきっかけだったのか、「したくないからしてみたい」が発動したのか、折しも母から青い鞆をもらったこともあり、1年ほど前、人生初のブルー、ネイビーブームが到来。実はカラフル期を含めて、私は青系をほとんど身につけず、持たずに生きてきた。どのブームのときにも赤が好きで、暖色が似合うと思っていたので、寒色は似合わない気がしていたのだ。が、ようやくよさがわかるようになり、気分はあっさりブルー、ネイビーに。

こうして現在の部屋と私は、狂乱のピンク期の名残のチェストややかん、ベースのホワイト、そして新参のブルー

の服や鞆と、なかなかの過渡期ぶりである。

ところが、これでも話は終わらない。数ヶ月前から、子ども時代ぶりに黒を着たい気持ちがあわき、再び黒やグレーのモノトーン勢が勢力を盛り返し、かつてのひらひらレースを忘却、時代は辛めへ。

そろそろ落ち着いて、これからはもうこの色で、とやっていければよいような、でもいっただってブームの中になるときはそのブームに満足しているのだから、次がどうなるかは、私にはわからない。ただ、今私に來たブームに乗るだけ。



Nectarine

# 神隠し

古賀 啓三

(米国ミシガン州 隠棲)

この話にはわたしも入れて、六人の人たちが出てくる。その内五人が日本人か日系で、白人はルークだけ。アメリカ人が四人と日本人が二人、と分けることもできる。

日曜の朝、カレンに抱かれたままの格好で目が覚める。本当の歳は知らないけど、娘のナオミは大学院の二年生なので、四十代の後半、ひよっとしたら五十代前半？わたしははたちで、わたしを産んだときのお母さんより、ひとつ上だけど、お母さんの方がカレンより老けて見える。

いや、写真に写して並べたらカレンが歳上であることは直ぐわかるのかも知れないけど、ちよっとした仕事とかで若くて活発に見えるのかも知れない。立ち居振る舞い？美大の仲間が良く使うスラングに *Swag* という言葉があって、カッコいいとか、クールとかいう意味だと思っただけで使ってたけど、誰それには *Swag* がある、とかいう使い方もするみたいなので、休み時間、TA (Teaching Assistant) のナオミに聞くと、難しくしてよ

く分からなかったけど、多分「自信」とか「存在感」とか「雰囲気」とかっていう意味らしい。

それはわたしが一年前アメリカに来たときから感じていた、空港とかホテルのロビーとかいうパブリックな場所、時間を潰したり、特に何かしてるわけじゃないんだけど、日本人と較べてアメリカの方がシユツとしてる、という印象はこの *Swag* があるひとが多いからかも知れない。違うかな。

公共の場で、日本人の場合、人混みはあっても知らないひとばかりだと、誰からも見られてないのと一緒に、なんかぼかんと口を開けたりして緩みきっている感じ。アメリカのひと達は、なんかそういう場所でも誰かに見られてると感じてるみたいに見える。わたしは深くものを考えるのは得意じゃないけど、それってあのひと達と、あのひと達の神様との関係かな、とか思った。神と個人との直接契約とかいう言葉を聞いたことがあるような気もする。

わたしはアメリカ西海岸北部の観光都市にある美大に留学していて、一年目が終わったところで、三ヶ月の長い夏休みをトラベル・エージェンシーでバイトしながら過ごしている。仕事の内容はツアー旅行の日本人相手のガイドや、オフィスでの簡単な事務。人物デッサンのクラスのTAのナオミになんかサマー・ジョブないかな、と相談したら、母親のカレンがディレクターを務める旅行会社を紹介してくれた。ナオミは日系(五世)なので



親しみやすい。

カレンとナオミはよく似ていて、どっちも頭の良さがわかるシュツとした顔で、動作もきびきびしている。ナオミは油絵専攻だから絵の具塗れのTシャツやジーンズだけど、カレンは服装もビジネスっぽくシュツとしている。

日系といっても、表情なんか完全にアメリカ人で、ふたりとも日本語は喋れない。ナオミがスタジオの端で壁に寄り掛かかって、腕組みして、自分が今モデルにつけたポーズを眺めている様子とか、カッコ良くて、あんなのも誰かに見られてる、と思ってるとしか思えない。ナオミはカレンとの面接についてきてくれて、結局三人で十分ほどの雑談だけで、来週からいらっしやいと言われた。カレンはエレベーターホールまでわたし達を見送ってくれて、わたしがお礼をいうために急に振り向くと、わたしのからだをじっと見てて、そのときは神様の視線を気にしてる風じゃなかった。

仕事以外でカレンのオフィスにしょっちゅう来るのは、デンとルックっていう、多分ゲイのカップル。デンも日系らしい。ルックは白人だけど、ふたりともデカくて、雰囲気もよく似てる。外人の歳はよくわからないけど、話してる感じから、カレンとは多分とても長いつきあいなんだと思う。ふたりともだけど、特にデンの方はナオミが居るととても嬉しそうで、彼女の言うことを前屈みになってニコニコしながら聞いている。

これは誰かに見られてるからかどうかわからないけど、絵の個展のオープニングに行つて聞いてきた、アーティストのゴシップや、今年のブツカーなんとかつていう賞みたいなものをもらった本の話や、難しい政治の話とか、あのひと達は話してる中身もコーショーで、肩が凝らないのかな、つて感じ。日本人だったら、しょっちゅう会つてたら、すぐクダけて、くだらない話とかばかりにならない？

もうひとり、ナオミと一緒に来るトシ、つていう日本人のおじさんがいる。わたしは苗字でオザワさん、つて呼ぶ。日系企業に勤めていて、ナオミの彼らしいけど、歳は多分カレンや大男たちよりも上なんじゃないかな。ナオミも物好きだと思っけど、私が入学する直前まで、聴講生という身分で、ナオミが助手をする人物デッサンのクラスを取らせてもらっていたらしい。このひともアメリカには留学で来て、そのままずっと居続けたのらしくて、英語なんかもわたしよりはずっと上手い。だけど、表情とか、素振りの「見られてる感」、はやっぱり日系の四世や五世とは違う。やっぱり日本人。だけど、そういうのに近づきたくて、このひと達と頑張つてつきあつてるような気がする。

働き始めて最初の金曜日、カレンから、良かったら明日食事に行かないか、と誘われた。後でわかるんだけど、金曜の夜はデンやルックやナオミやオザワさんとのコー

シヨーナ集まりの日らしい。

彼女の行きつけらしい、和食とフレンチか何かのフュージョンっぽい、高級っぽいけど、こじんまりしたレストランで、お酒も結構たっぷり飲んだ後、もう少し飲もうと、かつて自宅に連れて行かれた。

それから土曜がわたし達の夜になるんだけど、一回、日曜の朝、ナオミが突然、合鍵で入ってきて、カレンはもう大慌てで、わたしは裸のままクローゼットに押し込まれ、彼女達がパンケーキを食べ終わり、ナオミが何か取りに来たものを持って帰るまで暗闇で息を殺していた。わたしは自分がレズだと思ったことはなかったけど、気持ちいいし、特にいやでもなく、ただカレンの変わり方の凄さが可笑しかった。知的で上品なビジネス・ウーマンがイヌになってしまう。

カレンのところで働き始めてしばらくすると、オザワさん(トシ)からオフィスに電話があり、もう慣れたか、とか、考えてみると初めて日本語で話し、やっぱり日本語は楽しいね、今度食事でもしながらゆっくり話そうと誘ってくる。このひと達ならきつと高くて美味しいものを奢ってくれるに違いないから、いいですよ、というとか、今夜行こうという。あ、カレンには言わないほうがいいね、と付け足して。あのひと達の神様に睨まれないところで息抜きしたいのかな？

オフィスから歩いてすぐのホテルの最上階のレストラン

ンでご馳走を食べると、部屋も取ってある。最近、ナオミが彼のアパートに引越したことは聞いている。アパートにはナオミがいるからここ？とちよつと意地悪で言うと、凄いや顔になって、クリス・アキノって知ってるか、と聞く。人物デッサンの先生なので勿論知ってる。ナオミは彼の助手。ナオミは僕が知らないと思ってるみたいだけど、あのじじいともできてるんだ。じじい、って自分と一緒くらいの歳じゃない？それにそんなこと、学校じゃ誰でも知ってるよ、と思ったけど言わない。だから自分達がこうなることはOKなんだ、って感じで触れてくるけど、可哀想だから拒まない。

わたしは、いつも誰かに見られてる、なんて窮屈なこと、考えたくないけど、でもそうやって自分をコントロールして、いつ誰に見られても恥ずかしくない自分についていか、Dignityを保とうとすることは立派だと思う。だけど、なぜわたしとなら誇りに思えないようなことをしてもいいと思うんだろう。

あのひと達の神の視線があの一と達にある種の行為を強いるのなら、わたしも神様なのかも知れない。あの一と達の神の視線を覆す、より強力な。



定有堂教室案内 四月

○「シネクラブ・ティユウ」日にち未定 金曜 19 時から

○「読む会」五月一日 火曜日 19 時から

テキスト『日本の近代とは何であったか』岩波新書



一緒に太極拳、やりませんか。

定有堂2階

## 遊動円木

十二

字の小さき古き詩集や春の雨

引鴨の明け渡したる湖と空

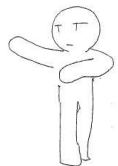
飴玉を舌に転がす春夕

爪立ちに枝選り剪りぬ紫木蓮

放哉忌落花浴びたる町の句碑

五百川 知子

アシル



# シュシュのはなし

ドラマリ

ア

(座敷わらし)

シュシュを集めている。「シュシュ」が何かわからない人のために大辞泉で得た知識で説明すると、「輪になった筒状の布にゴムを通したもの。女性が髪を束ねるのに使う。」とある。こう聞くと、一度はご覧になったことがあるのではないだろうか。

後ろでまとめる今の髪型にして二十年。ひどいくせ毛のうえ不器用なのであまり自由な髪型もできず、変化をつけられるのは髪飾りぐらい。コレクター気質はあまりなく、シュシュ自体に特別愛着があったわけでもないのだが、普段使いのもの・冬向きの素材・スーツにも合うデザイン……などなど集めていくうちに、だんだん数が増えてきた。さらに、今の職場に移ってからは、曜日ごとに服装のテーマカラーがあり（自主的に・ごく一部の間で）、それに合うものも揃えてみたりする。火曜日は緑、水曜日は縞、金曜日は青。

そうこうしているうちにシュシュの数はさらに増え、先日何気なく数えてみて驚いた。その数、実に七十六個。毎日付け替えても、二か月半は余裕で過ごせる。おまえには頭がいくつあるのだ！ と捨て神様に怒られそうだが、ただ、一ついいところもある。シュシュに凝っていると周囲に知られることで、人から贈られる機会が増えた点だ。さほど値も張らず、好みもある程度把握しやすいので、贈る側も迷わず便利なのだろう。

そんなわけで、私に付け届けをされる際はシュシュがよるしい。というのが今回の結論。

・編集後記:

袋川の桜が満開です。この間、あきさんと夜桜見物をしました。急に満開になったのでそれほど人も多くなく、雰囲気存分に楽しめました。

ドラマリア（編集長）

二十一号に入り、気持ちの一新が感じられます。本のピオトープの輪郭が見え始めているようですが、いかがでしょうか？

奈良敏行（発行人）